

裏口の鍵、渡すから
～銭湯でカントがバレ
た閉店後～

「お客さん。閉店だよ」

振り返ると、宮前湯の若旦那——宮前壮介さんが素足でタイルの上に立っていた。作務衣の袖をまくり上げて、片手にケロリン桶をぶら下げている。

「あ、すみませ——」

立ち上がりかけた僕の動きが、途中で凍る。壮介さんの視線が僕の身体を——正確には、僕の股間を射抜いていた。

反射的にタオルで前を隠す。濡れたタオルが太腿に張りつく。指先が震えていた。

壮介さんが一步、踏み込んでくる。裸足の足裏がタイルを鳴らす。もう一步。

「毎晩こんな時間に来て、壁際で鏡に向かって、タオルも外さず。——何を隠してるのか、ずっと気になってたんだよね」

「っ……」

喉が張りつく。声が出ない。

「今夜、モニター見ちゃった」

たったその一言で、膝から力が抜けた。

(バレた——)

三ヶ月。三ヶ月間、毎晩22時40分にここへ通って、壁際の一番奥のカランで鏡に向かって座って、タオルを一瞬たりとも外さないように気をつけて。湯船には絶対に入らないで。

閉店間際の僅かな時間に身体を洗って帰る、それだけの日々。

全部、無駄だった。天井の防犯モニターが全部映していた。

壮介さんがケロリン桶に湯を汲んで、僕の肩からかけた。
止めたばかりのシャワーの代わりに、温い湯が鎖骨を伝い、
胸を流れ、腹を滑り落ちていく。

「冷えるだろ。まだ話は終わってないから」

後退る。背中がタイルの壁に当たる。冷たい。壮介さんが
しゃがみ込んで、僕の膝の高さで見上げてくる。ボイラー焚
きて日焼けした首筋。短く刈り込んだ髪。太い指。大きな掌。

「タオル、どけてくれるか」

「い、嫌です——帰らせてください——」

「帰ってもいいけど。モニターの録画、結構ちゃんと映って
るよ」

——指先から、力が消えた。

タオルが落ちる。ぺちゃり、と湿った音を立てて足元のタ
イルに広がった。

壮介さんの目の前に、僕の——晒される。

湯上がりで薄桃色に上気した割れ目。閉じた肉の合わせ目
を、さっきかけられた湯の雫がゆっくりと伝い落ちていく。

壮介さんが短く息を吐いた。熱い吐息が、僕の太腿の内側
にかかる。

「……綺麗だな。こんなもん毎晩隠してたのか」

「見ないで……っ♡」

「3ヶ月も隠されてたんだ。じっくり見る権利はあるだろ」

(見られてる——この人に、ここを——)

壮介さんの親指が、割れ目の外側に触れた。ふっくらした膨らみに、ボイラー焚きで硬くなった指の腹が押し当てられる。湯で温まった肌同士が触れ合う感触。絹を撫でるような、やわらかい圧。

「ひっ……♡♡」

身体が勝手に震えた。

「触んな……っ♡」

「お前、ここ自分で触ったことあるか？」

「ない……っ♡ 触りたくもない……っ♡♡」

「じゃあ俺が最初でいいよな」

(よくない。よくないに決まってる。なのに——声が、出ない)

壮介さんの指が、割れ目を上からゆっくりとなぞった。指の腹が肉の合わせ目を割り、中の湿った粘膜に触れる。

「ひあ……っ♡♡」

自分の喉から出た声とは思えなかった。甲高くて、みっともなく、こんな声を出す自分が信じられない。

(男なのに——男なのに、こんなところ触られて——)

壮介さんがケロリン桶にぬるま湯を汲み直す。片手で僕のそこを開いたまま、上からゆっくりと湯を流した。温い湯がクリトリスの先端を伝い、割れ目の奥へ流れ込んでいく。

「やぁ……っ♡♡ そんなところに湯、かけないで……っ♡♡」

「銭湯屋が客にかけ湯して何が悪い」

からん、とケロリン桶がタイルに置かれる。代わりに両手が僕のそこに伸びてきて、左右にゆっくりと開かれた。

「っ……♡♡♡」

花卉みたいに広がった肉襞の奥。充血して小さく震えている突起を、壮介さんが覗き込む。

「お前、こんなに勃ってるのに、触ったことないのか。もったいない」

壮介さんの指先がクリトリスに触れた。

「ひっ——っ♡♡ さ、触ったら——っ♡♡」

腰が壁から浮く。膝がかくんと折れて、壮介さんの肩に手をついた。

「触ったら？」

「わかんない……っ♡♡ 自分でも、わかんない……っ♡♡」

（わかんない。こんなの知らない。身体の奥が熱くて、お腹の底がぎゅって——）

壮介さんが洗い場の椅子を引き寄せた。プラスチックの脚がタイルを擦る音。僕の腰を掴んで座らせ、両脚を持ち上げて自分の肩に担ぐ。

「ちょっと、そんな近くで——っ♡♡」

壮介さんの顔が、僕のそこの真正面にある。温い呼気が粘膜に当たって、ぞくりと背筋が震えた。

「黙ってろ。調べてるだけだから」

壮介さんの指がくるくると入り口をなぞる。ゆっくり、ゆっくり、円を描くように。

——とろ、と。

何かが溢れた。

「や……っ♡♡ なんか出て……変な……っ♡♡」

「お前が濡れてるんだよ。おまんこが俺の指欲しがって」

「おまんこって言うな……っ♡♡」

（言うな。そんな名前と呼ぶな。僕は男なのに——男の身体のはずなのに、なんでそこから——）

ずぶ、と指が入った。

「っっっ……♡♡♡」

身体が硬直する。中の肉壁がきゅう、と壮介さんの指を締め付けた。異物感。でも痛くはない。痛くないことが、余計に怖い。

「きつつ……処女だろうな、これは」

「なかっ……指、入れないで……っ♡♡」

「もう入ってるよ」

壮介さんの声。低くて、当たり前みたいな口調。事実だった。もう入っている。僕の中に、この人の指が。

ゆっくり抜いて、入れて。抜いて、入れて。

じゅく、じゅく、と音がした。

浴室のタイルに反響して、何倍にもなって天井から降ってくる。自分の身体が立てている音だと理解した瞬間、頭の中がぐらぐら揺れた。

（男なのに。男なのに僕の身体は——指一本でこんな、みっともない音を——）

壮介さんの指が中でくい、と曲がる。

「おっ♡♡ そこ……っ♡♡ 奥の壁、こすらないで……っ♡♡」

「ここか？ ざらざらしてるところ」

「おおっ♡♡ やだ……っ♡♡ 何それ……おかしくなる……っ♡♡」

二本目が入ってくる。ぐ、と内壁が押し広げられて、そのざらざらした部分を集中的に擦られた。

壮介さんの空いた手がシャワーヘッドを取る。カランを捻って、水流をクリトリスに当てた。

「びっ♡♡♡ だめ、だめ……っ♡♡ お腹の奥が、きゅうって……っ♡♡」

指と水流。中と外。同時に責められて、椅子の上で身体がくの字に折れる。逃げ場がない。壮介さんの肩に乗った脚が震えて、かかとが壮介さんの背中をばたばた叩いた。

「イきそうなんだろ。いいよ、出せ。銭湯だから全部流れるし」

「イクってなに……っ♡♡ そんなの、したことな——」

三本目。

ずぶ、と突き入れられて、奥の壁をえぐるように押された。

「おおあっ♡♡♡」

——何かが、弾けた。

身体が勝手に反る。椅子の上でびくんびくんと痙攣して、壮介さんの手にびしゃっと何かがかかった。タイルに飛沫が散って、排水溝に向かって流れていく。

「ッ——♡♡♡ ～～ッ♡♡♡」

声にならない。喉が引きつって、空気だけが漏れる。

(何……今の、何——身体が勝手に——止まらない——)

壮介さんが自分の濡れた指を見下ろしていた。それをゆっくり口に含んで、舐める。

「銭湯の湯より、お前の味のほうがいいな」

僕は椅子の上で丸くなって、がくがく震えていた。

＊

壮介さんが僕を椅子から降ろして、カランの前に座らせた。
壁の鏡に向かって。

鏡に、自分が映っている。涙と湯で濡れた顔。上気した肌。
半開きの口。——目を逸らした。

「見ろよ、鏡。自分のおまんこ見たことないだろ」

「やだ……見たくない……っ♡♡」

「見ろって」

壮介さんが背後から僕の膝を持ち上げる。M字に開かされた。鏡の中に、濡れて上気した割れ目がくっきりと映っている。充血したクリトリスが小さく震えていて、さっき三本の指で広げられた入り口から、とろりと愛液が垂れていた。

「これがお前のおまんこだよ。綺麗だろ」

「綺麗なわけ……っ♡♡」

（こんなもの。こんなもの見たくなかった。二十五年間ずっと目を逸らしてきたのに——）

壮介さんが僕の前に回り込む。カランの床にタオルも敷かずに膝をつく。僕の太腿を持ち上げて、そこに顔を近づけた。

「待っ——口は——口はだめ——っ♡♡」

舌が、下から上へ這い上がった。

「んっ♡♡ んっ♡♡」

肉褰を一枚ずつ。ゆっくりと。味を確かめるように丁寧に舐め上げられる。壮介さんの舌は熱くて、柔らかくて、指とは全然違う。

「舌……っ♡♡ 中に舌入れないで……っ♡♡」

壮介さんは構わず舌を奥に滑り込ませた。クリトリスを唇で吸い上げて、舌先でこころと転がす。

じゅる、じゅる、と淫猥な吸引音がタイルの壁に反射する。天井の高い浴室に何重にも反響して、まるで何人もの人間がそうしているみたいに聞こえた。

「おひ……っ♡♡ 音……やだ、響い……おあっ♡♡♡」

（こんな場所で——銭湯の浴室で、こんな音が——僕の身体がこんな音を立ててる——）

壮介さんの舌がクリトリスを嬲りながら、指が二本ずるりと中に入ってきた。舌と指。外と中。さっきの水流と指の比じゃない。人の舌は水流より熱くて、柔らかくて、自分の意志で動く。

「れ……っ♡♡ 壮介さ……っ♡♡ だめ……壊れ……もう壊れる……っ♡♡」

「壊れていいよ。直してやるから」

壮介さんの声がかくぐもっている。僕のそこに口を押し当てたまま喋るから、振動が粘膜に直接伝わって、脳みそが揺さぶられるみたいだった。

舌がクリトリスの根元をえぐる。指が奥のざらついた壁を搔き上げる。

「おおおおっ♡♡♡ イく——またイっちゃう——っ♡♡♡」

二度目。壮介さんの顔に潮がかかった。壮介さんは顔を拭きもせず、そのまま舐め続ける。

「やだっ……イったばっかなのに……敏感すぎて……っ♡♡」

余韻が引かないうちに壮介さんが立ち上がった。作務衣の前をはだける。

——見てしまった。

ボイラー焚きと配管修繕で鍛え上がった腹筋の下。太く振り返った肉棒が、先走りでてらてらと光っている。

鏡にも映っている。裸で脚を開いた僕と、猛ったものを晒した壮介さん。その二人の姿が、洗い場の鏡にくっきりと。

「あ——」

声にならなかった。

＊

壮介さんに腕を引かれて、湯船まで歩かされた。脚がまだ震えていて、壮介さんの腰に手を添えなければ崩れ落ちていた。

湯船の縁。深い浴槽に張られた湯から、まだほのかに湯気が立ち昇っている。